



ウェストミンスター橋から見た補修工事前の英国議会議事堂 ©The UK Parliament. 撮影 (Artist): Jessica Taylor

## 時を刻み、 時を見守る2本の針

「時の流れに対応するため、ビッグベンを改修し、デジタル時計にすることになりました」

1980年4月1日、英国の公共放送BBCはこう報じました。実は、エープリルフールの日(注1)でしたが、BBCでは古くからビッグベンの鐘の音を国内のみならず世界中に時報として流していたこともあり、デジタル化を嘆く手紙が数多く寄せられたそうです。

ビッグベンの歴史は古く13世紀末、国王エドワード1世が、貴族や聖職者だけでなく各都市から2名の市民を招集して1295年に開催した「模範議会」の頃にさかのぼります。現在の塔は1859年に完成し、「クロック・タワー(時計塔)」という正式名称でしたが、2012年にエリザベス女王即位60周年を祝い「エリザベス・タワー」と改められました。厳密には、ビッグベンは塔内の鐘の愛称で、現在の塔の建設時の現場監督ベンジャミン・ホールの名に由来するという説が有力です。

このビッグベン、現在補修工事が進められています。約35年ぶりの大掛かりな工事で、15分おきに鳴る

小さな鐘、1時間おきに鳴る大きな鐘ともに昨年8月から止められています。建屋も足場に覆われていますが、英国議会議事堂側の文字盤は足場から顔をのぞかせ、時を刻んでいます。

そのビッグベンに見守られる英国議会は、「模範議会」からみても700年を超える長い歴史を有していますが、女性が国会議員選出の投票権を獲得したのは、わずか100年前の1918年でした。今年はその100周年にあたることから、「Vote100」という女性の政治参加をテーマとした各種イベントも国内で開催され、英国議会のホームページ上でも女性の投票権獲得の歩みが紹介されています。

サッチャー、メイ両首相の活躍にも象徴される英国人女性の政治参加の歴史を見守ってきたビッグベン。今年2月には女性初の黒杖官(注2)が任命されるなど、この歴史には今後も新たなページが加わるでしょう。

ビッグベンは、2021年に予定される補修工事完了後も、昔と変わらぬ2本の針が時を刻み、時を見守ります。  
(日本銀行ロンドン事務所)

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

(注1) 英国では、BBCをはじめとしたメディアが4月1日にジョーク記事を流し、多くのメディアの受け手はそのジョークネタを楽しんでいます。  
(注2) 英国議会上院で、儀仗と警務を担当する職務。



テムズ川対岸から見た英国議会議事堂



補修工場の足場に覆われている様子